事業実績（2024年度）

事例１　採血室混雑の解消

起案側：医師、看護部　　関連側：医師、看護部、臨床検査、医事課

改善前

・採血室での１日平均採血患者数は300～400名に対して、採血対応者は4～5名と少数で対応している。そのため、採血待ち時間は長い方で90～120分待たされることもあり、一部苦情も出ている。

効果

・患者を待たせていることによる切迫感が解消され、採血者の気持ちに余裕が持つことができ、事故リスクの低減につながる
・スムーズな運用確保により、スタッフの労働意欲が維持できる
・採血室の回転率が上がる
・焦りのない環境作りにより刺しなおし等が少なくなるとが予想される

結果

・必要人員を確保し、全採血ブースを稼働させることで、採血の待ち時間を減少させることができた。
・依然課題は残っているものと推察される。

事例２　外来待合室モニターの有効活用

起案側：多職種連携推進委員会
関連側：病院管理課、医事課、看護部、医師

改善前

・外来モニターに患者の診察順番が表示されない。
過去に診察順番を表示しようとしたが運用が伴わず、モニターが残されている。

改善後

・外来待合室モニターに、各診療科、部門からのお知らせを投影することで、患者への情報提供を行うことが可能となる。患者の待ち時間対策にもなると考えられる。

結果

・外来待合室に設置されたが利用されていなかったモニターの有効利用を検討した。今後は情報提供媒体としてモニターへの投影を行う予定となった。

費用

なし

事例３　入院患者の出棟時転倒防止を目的とした患者情報共有の仕組み

起案側：臨床検査・輸血部(中央診療施設)
関連側：看護部、医療の質・安全管理部、医療情報部、医療支援課

継続案件

・昨年の部門間の問題である入院患者情報の共有のために入院患者カードを用いた転倒リスクの伝達方法を2024年3月に運用開始したが、その効果検証を行う必要がある。

効果

・効果検証のため、年2回のアンケート実施および運用開始前後の入院患者転倒件数を検証し、入院患者情報を共有する仕組みの運用継続の是非および改善点の洗い出しを行うことができる。

結果

・アンケートにより、効果について肯定的な意見が多く、運用継続を希望する人が多かった。
転倒件数は減少した部署と増加した部署があるが運用外の部署で増加していることより一定の効果はあると思われる状況であった

費用

なし